

中村雄次郎にリズム論の核心部分

私の論文『[日本の精神と中村雄二郎の「リズム論」](#)』の第2章 中村雄二郎の「リズム論」第1節 「場所性について」の「2. 養老孟司の身体論」において、次のように述べた。

私は先に論考『[神話と現実](#)』において、『 神話を語るには「場所の持つリズム性」が重要である。宮沢賢治の童話や草野心平の詩を語るには「場所の持つリズム性」が重要である。私たちは、そういう「場所の持つリズム性」に着目すべきであって、子供や若者はそういう「場所」の発するリズムに耳を傾けなければならないのである。「場所」の発するリズム、それは風土の発するリズムということかもしれないが、そういうリズムに耳を傾けることによって具体性の世界と深く結び付いた感性というものが養われるのである。』・・・と述べた。

日本人と自然とは一体不可分の関係にある。日本人は、山や川に恵まれ、しかも四季折々の風景の中で自然と一体になって生きてきた。そういう日本独特の場所性を生きてきたと言える。場所性を生きるということは、場所のリズムに身を任せるということであって、俺が俺がと自己主張をしないのである。無為自然の姿がそこにある。だから日本人は、無意識のうちに老子の言う自然、道、宇宙の真理が身に付いているのではないか。自己主張をしない日本人。これが日本人の特性だ。日本の精神とは述語的生き方であり、日本の歴史伝統文化の心髄は、違いを認める文化である。

それが、中村雄二郎のリズム論であると思う。

なお、京都大学名誉教授・岸根卓郎の『量子論から解き明かす「心の世界」と「あの世」・・・物心二元論を超える究極の科学』（PHP研究所、2014年2月）という本がある。量子論は非常に難しいが、この本もなかなか難しい。しかし、その中で「文明リズム」という聞きなれないが、大変面白いことがあるようで、ここに紹介しておきたい。日本の精神を生きる我々日本人の素晴らしい点に触れているからだ。

<http://www.kuniomi.gr.jp/geki/iwai/bunmeirizumu.pdf>